
帝国

色織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

帝国

【Nコード】

N2444Z

【作者名】

色織

【あらすじ】

ありがちな異世界トリップ。本当にありがちです。

序

四週間の実習の最後は、舌が溶ける程に甘くした温かいカフェオレで締め括る。

報告書の最後の句読点も書き終わって、昨日までなら既に寝てしまっている時間に起きている事実小さくほくそ笑んだ。

ああ、自由！素晴らしい！！

ローライズ価格大量生産品の半纏に身を包み、瀬渡青湖は電気ストーブと炬燵をフルに活用した25℃の適温自室で全身の力を抜いていた。

高校卒業後、就職してしまうよりモラトリウムと言う名の自堕落な期間を過ごしたい。のが大半の理由で専門学校へ進学を果たして二年。その期間も、実習が終了した今となってはあと僅かなものしかない。

これからは学校の廊下に張り出されている求人を見てテキトーに就職先を見繕う日々が暫く続くだろう。手に職はついた。第一条件は自宅に近い所だ。

何だかやる気が無いようになってしまっただが、まあこんなものだろう。

高校時代のようにきゃーだのひゃひゃひゃだの言っているだけでは駄目な事は理解しているつもりだ。何時までも親の脛はかじっていられない。常識の範囲に乗っ取って時折歯を立てる位にしないとご近所さんの噂になってしまう。折角専門学校に行ったのだからせめて就職はしないと。

やりたい事？なにそれ美味しいの？？そんな崇高な目的を持って生きている人間なんてきつとこない。

適当にかかっていたテレビのバラエティを消す。一ヶ月の間録り貯めたドラマは明日の休みに見る事にする。午前中の間に起きられれ

ば。

カフェオレボウルを流しに置こうと立ち上がる。
ふ、と。

眼の前が暗くなった。

疲れているのが原因の立ち眩みにしては緑色の濃度が濃い。

ヤバいなと思った。

このカフェオレボウルは友人が某夢の国へ行ったときのお土産で使
いやすくて気に入っていたから出来れば割りたくない。

これだけ考えることができるなんて余裕だな。

青湖は流れるに任せて目蓋を落とした。

糖分はしこたま採った。だからまあ。

大丈夫だ。

まず最初に感じたのは空気の違いだ。

埃っぽいと言うか粘つくと言うか。

臭うと、言うか。

それでも眼を開きたくない。

だって。

横になっている身体の、体重を支える為に接している地面が何だかしっとりしている。まるで、水を吸った土みたいに。

そんな事はあるはず無いのだ。

ここは築二十五年の2LDKのアパートで駐車場料金は無料。ユニットバスは絶対に嫌だった。ちよつと良い冷蔵庫を買って貰って重宝している。買い込んだ調味料は結局、鶏ガラスープとコンソメ、昆布つゆ、みりん位しか使っていない。気が向いたときにブイヨン。地デジ化はギリギリまで粘った。勢い余ってPS3を買ってしまったから予算がやばかった。今流行りの白姫なんとかみたいな部屋にはしたくて、意識しながら好きなようにやっていたら和洋折衷たまにアラビアな無国籍な完成になった。レトロな雰囲気が好きなのでどうにか上手く纏まってはいる。

過ぎしやすく、愛着のある我が城。生ゴミは昨日ちゃんと出した。

覚醒しているくせに意志の力で目蓋を開いていないだけなので、瞳孔を隠す肉が一度ひくりとする。

臭いから感じた違和感は、更に他の感覚器官へ不自然さを連鎖させ襲いかかった。

テレビの音では決していない、不特定多数の人間の声が聞こえてくる。知覚している季節はアパートの側の公園で盆踊り大会をする頃とは真逆だ。

そんなに長く側臥位の姿勢をとっていた訳ではないのに服の繊維の

間をじわじわと水分が上がってくる。最近、雨は多量に降っただろうか。

もう、腹を括ってしまうしかないのかもしれない。

次に呼吸をしたら眼を開けよう。口では変な物体が入ってきそうなので鼻呼吸一択で。

空気を吸い込む。吐き出す。

「……………ッッ！！」

指先を脚の多い虫が這う感触がして、青湖は背骨を震わせながら上半身を起こした。

吃驚した。足長蜘蛛を遠くへ放る。

「……………あー…」

意図せず視界に入り込んできた世界は壁と壁に挟まれた隙間。排水が間に合わずに溜まった水は脂と無理に混ざり合おうと鉛色の醜態を曝していた。端に積み上がった塵。アスファルトで舗装されていない地面を久々に見た。虫の羽音がする。

さて、ここはどこだろう。

居室では無い。何事だ。

灰色のスエットが斑に黒くなった。素足でここを徘徊するのは憚られるので、靴下の大切さにありがとうと声をかけたい。

よろめきながら立ち上がる。少し、暑い気がしたけど服を脱ぐより他にやることがあった。

影になって暗い場所から、視線だけを外へ出す。

「……………う、っわー…」

人が歩いていた。

前時代的な、十八世紀仕様なデザインの洋服を着て。否、服飾にそんなに詳しくないので十六世紀かもしれない。そもそも世紀だとか朝式だとか言うのは限られた極一部の上流階級の人間達だけのもので下々の庶民には関係のない世界の出来事なのだろうと思う。

シャツとズボン、踝まで隠れる長いスカート。表記だけすると最寄り駅の男女の普段と変わらない装いだ。ただ、彼等の装いには遊び

心と色味が圧倒的に足りない。垢じみていると言ってしまったても良い。

コスプレをするにしても何故階下の人々、もっと華々しい格好の方が納得できるのに。リアリティも追求しすぎである、笑えない。

高い建物が何もなく空が遠かった。

ガラガラと台車で荷が運ばれていく。

陽は角度を鋭くしていて、入りなのか出なのか少し迷った。斜向かいの辻角に、胸元を不自然な程露出させた女性が立っていた。夜鷹の類が仕事をし始めるならきつと夜が近い。

青湖は喉の奥で唸り声を上げた。

こんな場所で、夜をどうしろと。もし夜鷹さんの同業者扱いされてしまったら非常に困る。この辻を営業場所として定めている個人事業主と諍いも起こしたくない。争い事は真っ平御免だ。コンマ三秒で負ける自信がある。

まずは移動をミッシュンとしようと思いを飲んだ。状況にそぐわない自らの衣装を隠せる物を探して当たりを物色する。塵の小山に掛かっている布だか植物を編んだのだかいまいち判断下しかねる歪な四角形を拝借しようか。

摘むように持ち上げて、そっとおろす。動物の死骸が小さな生物達によっていただきますされている真っ最中だった。うん、お食事お邪魔して申し訳ありません。もうしません。

「おい！！」

怒気を孕んだ、声がした。

首を竦め、一瞬反射で萎縮する。

近くで聞こえたのではない。だが、確実に近づいてきている。

何人かの怒声と、煽るような意地の悪い野次。きやらきやらと笑う高い女の声。

咄嗟に、塵の陰へ身体を滑らせた。

どうにかなってからでは、遅いのだ。

ずじゃりと、小さな生き物が投げ捨てられる。壁にぶつかって奥の方へは滑ってこなかった。

その生き物へ向かい、数人の男達が罵声を浴びせ靴の爪先をめり込ませる。鈍い音が断続的に響いていた。

一方的な暴力の原因は漏れ聞こえる話の内容から察するに特に意味はなく、ぶつかったとかガンを飛ばしたとかそんな事らしい。

何だそれは馬鹿かとは思うものの、やめなさいと走り出して説教をする気概は青湖には無い。巻き込まれないように切に願いながら縮こまるのを誰が攻められよう。もう、はやく帰って寝たい。

家に帰りたい。なる台詞を実家にいても吐いたりするのだが、つまりはどういう事だろうか。口癖とは恐ろしい。あと、もう歳だから駄目だ。も良く言う。

現実逃避をした。

蹴る作業はまだ続いていた。

いくら何でも長いんじゃないだろうか。

耳を塞いで遠い世界の出来事と言うスタンスは崩さず青湖は思考する。

蹴られている物体の声らしきものは聞こえてこない。外的な力を加えられ続けた身体は内臓が弾けて骨が皮膚を破って死んでしまったのか。断末魔は聞きたくなかったから死んでいるならそれでいい。

そんなに治安が悪い場所ですらやって生きていこう。まずは自分の事だ。当たり前だ。

笑ってしまえる程最低な事しか思い浮かばないけれど。

青湖が、今生きる糧を得られる資本と言ったら女である事位だ。しかも、価値は底辺からのスタート。知識も知恵も地位もない、美貌？どこに落ちてんだんなもん。

戦場とか密室とか、境界がある場所で覚醒しなくて良かった。下手に近くに他人様がいなくて本当に良かった。糧を得られる唯一を、一等先に破壊でもされたらたまらない。

ぎゅっと眼を瞑って身を屈めて暫く。下品に笑いながら、理不尽な暴力を与えていた沢山の陰が去っていく。

詰めていた息を吐いた。

何処でも、罵倒の台詞は似たり寄ったりだった。それはつまり、言葉が理解できる事に他ならない。こちらの口から出る言葉が通ずればもっと良い。

強ばってしまった膝を伸ばしながら立ち上がる。

青湖は残された動かない物体に向かって恐る恐る近付いた。

汚物を含んだ泥にまみれた重みは、目視によると生物から肉の塊へと成り下がってしまった。全体的に黒っぽいから、致命傷は判別できない。

骸氏をまじまじ見るのは遠慮したいけれども嫌だ嫌だばかりではどうしようもなくて、頬の内側を噛む。服装の様子を学び、なるだけ背景とならなければ。半纏を破いて加工すれば民衆に紛れられる気がする。

それにしても。

「……………うん。」

野晒しのままでは元彼か彼女が可哀想だ。

姿ぐらいいは隠して差し上げようと側を離れる。

まだ子供だろくに、世の中の摂理とは恐ろしい。

きっと、ついさっきまで、生きて、いただろうに。

「……………ッ!!」

腹の奥から吐き気が込みあがってくる。

こんな場所で、自分は生きて行かなくてはならない。

膝を、付きそうになった。

ああ。こんな死骸に触りたくはないなあ。

「ッ!ウ、ツツ!!」

心臓を握り潰されるような感覚が、胸骨の真ん中でした。

ポンプで一気に流された血流は、身体中を駆け巡る。無い、出口を探して。

腰が崩れる。そして、手を付いてしまった。

じゅぐりとした、肉に。

胃酸が出る眉間が痛い視界が霞む鳥肌が立つ。

血が、下がる。

出て行く。

折角立ち上がったのに、また土に接吻してしまった。

死体も近くにあるのに。

………死体？

日が暮れきったのか辺りが見えない。街灯なんて気の利いたものは無い。

だから青湖は、自分のすぐ横で動いた何かが解らなかった。

「……………ど、うして？」

耳柄に他人の声が流し込まれる。誰だ。目蓋が重い。

今ここで、気を飛ばしてしまいそうな状況はヤバイのではないか。

それでも駄目だ。いかんともし難い。

呼吸が覚束無くなる。

誰かの声がまだ聞こえる。

視界を閉じる前に、眼の前が暗くなった。

待て、何を掛けた。

小さな虫達がお食事をしていた屋根代わりのアレでは無かろうな。

せめて、表と裏は逆にして欲しい。

身体が浮く。

もう、好きにしてくれ。

今は、駄目だ。

もう、駄目だ。

駄目かもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2444z/>

帝国

2011年12月19日21時51分発行